
亡きカノ

葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亡きカノ

【Nコード】

N2722F

【作者名】

莠

【あらすじ】

今の彼女と死んだ彼女が壮絶な恋バトル。めらめらジャラシー、ちよっぴら、おっ魂げ〜。あの莠、4作目。10話連続のえっ、嘘っっっ！

1話 死の真相

空港連絡橋を1台の車が関空に向かって猛スピードで走っていた。

「スピードを落とすんだ」

有馬満は悲壮な声を上げた。

「あんな女に取られる位なら・・・」

運転をしている松坂空の横顔は引きつっている。

「やめないか」

「畜生！渡せへんから」

「危ない！！！」

「あああああ・・・」

車は海を目掛けて突っ込んだ。

ザブーン。

ブクブクブク・・・。

車は海に吸い込まれて行った。

有馬満は病院のベッドで気が付いた。

後続車の警察への連絡が早かったせい、満は奇跡的に救出された。空は救出された時、すでに息を引き取っていた。

満は病院を退院すると、すぐに尼崎の西難波にある空の実家を訪れた。

「今日は。有馬です」

「えっ、有馬さん。車に同乗していたあの有馬さん？」

母親の松坂夢がインターホンから、驚いた様子で答えた。

「はい、そうです。このたびは・・・」

「いま出ます」

夢が急いで玄関のドアを開けた。

「この度は申し訳ありませんでした。僕が付いていながらこんな事になるなんて」

「悪いのは運転をしていたあの子よ。むしろ、とばっちりを受けたのはあんたよ。本当に無事で良かったやない」

「何と言ってお詫びしたらいいか」

「こんな所ではなんやから、どうぞ中に入って」

「それでは、お邪魔します」

満は居間に通された。

小さな座机の上に空の写真が無造作に3点飾られている。

「仏壇も無いから驚いたやろ。」

私は無宗教やから、葬式だって集会所で内内だけでしたんよ。

お坊さんだって呼べへんかったわ」

「そうなんですか。じゃ、どうすれば・・・」

「手を合わせても、合わせなくてもどちらでもご自由に。

写真を見ながら心の中で空にお別れを言ってもらえば、それでええんよ」

「わかりました」

満はその中の一点の空が微笑んでいる写真に向って心の中で語り掛けた。

（なぜ？死んだのだ。

あの時、スピードを落とさなかったのは、なぜだ。

悪いのは俺か。

お前とあいつが小・中学の同級生だったとは。

そんな偶然って、ありがた。

あいつとは何も無かった。

ただの仕事のパートナーだったのに。

もっと早くわかりやすく説明しておけば良かった。

悪かった。

悪いのは俺だ。

許してくれ）

満は心の中で手を合わせた。

「私、聞きたい事があるんやけど、ええかな」

空の母親の夢が満の顔を覗くように質問をした。

「いいですよ。何でしょうか」

「あれは事故やの？それとも・・・」

「事故です。空さんがスピードを出し過ぎて運転を誤ったのです」

満は咄嗟に嘘を付いた。

空が故意に海を目掛けて突っ込んだとは、満は到底言えなかった。

「スピードを出していたって、いったいどの位スピードを出していたん」

「100キロは超えていたと思います」

「どうしてそんなにスピードを出す必要があったんや？」

「飛行機の時間に間に合わせる為です」

「可笑しいなあ。

あの子は時間には几帳面な子やから、余裕を持って時間には対応すると思うんやけど」

「それが、あの日は何故が遅くなってしまったのです」

「信じられへんわ。

今までも待つことはあっても、人を待たせた事の無い子やで。

本当に飛行機の時間に間に合わせる為なんか？」

「では、お母さんはなぜスピードを出したと言われるのですか」

「それは、私にはわからへんわ。ただ、飛行機の時間が原因ではないように思えるんやけど」

「じゃ、何だと言われるのですか？」

「私の直感やけど・・・」

そう言って、夢は満の目の奥を見詰めた。

（お母さんは事故死だとは思っていない。
遺書でもあったのだろうか）

満は夢の目を見る事が出来なかった。

（何もかも見透かされている）

満は空の写真に視線を合わせながら思考を巡らせていた。

「本当の事が知りたいだけや？」

「・・・」

「なぜ、本当の事が言われへんの」

「言っているじゃないですか」

「嘘おっしやい」

「嘘だなんて。何か証拠でもあるのですか？」

「ああ、あるで」

夢は空の日記の事を思い浮かべていた。

「遺書でもあったのですか？」

「ほら、やっぱりそうやる。私の思っていた通りやわ」
「思っていた通りって」

「じゃ、あんたに聞くけど、事故で突然死ぬ人間が前もって遺書な

んか書くか」

「そらあ・・・」

「事故じゃなかったんやろ。私の睨んだ通りやわ」
夢が満を見ながらほくそ笑んでいる。

「証拠つて、何があつたのですか？」

「あれは、嘘や。鎌を掛けただけや。
男らしく白状せんかいな。」

それがあの子に対するせめてもの供養と言つもんや」

夢は空の日記の事は内緒にしておこうと思った。

「お母さんにはかなわないな。」

じゃ、自殺という事にしておきましょう」

「自殺というより心中やね。」

それも、無理心中。

どう、凶星やろ」

「警察は事故じゃなく、心中だと思っているのですかね」

「警察は事故と思ってるのとちゃうか」

「じゃ、なぜ心中と思うのですか？」

「勘や。母親の勘。というより、女の勘やな」

「女の勘か」

「私も始めは、あれは事故やと信じとったわ。でも、あんたから飛行機の時間に間に合わせる為に、空が猛スピードを出して事故ったって聞いた時、ピーンときたんや。事故や無かつたんやとね」

「あの言葉ですか」

「25年もあの子の母親をしているとわかるんよ。

あの子の行動の仕方がな」

「参ったな、お母さんには。

本当の事を言つて、僕もあの時、なぜ空さんがあんなにスピードを出して、ハンドルを切り誤ったのか、よくわからないのです」

満はあくまで空が運転を誤って海に転落したと言い張るつもりでした。

「最初からあんなに飛ばしていたんか」

「いいえ。途中からです」

「何かあつたんか？」

「そう言えば、九州に行くのを僕がキャンセルしたいと言いだした時位から車を飛ばすようになったかな」

「なぜ、九州行きをキャンセルしたいと思つたんや？」

「急に仕事が入ったからです」

待ち合わせを2回ドタキャンした埋め合わせの九州行き。迷っていたが、関空に着く直前になって思い切つて満は断つたのだ。

（空の祖母には会いたくない。

会えば、結婚しない訳にはいなくなる。

まだ、結婚する気にはなれない）

罰の悪いあの時の感情が、満には今はつきりと蘇ってきた。

「九州行きをあんたがキャンセルしてから、空はスピードを上げたって訳やな」

（なぜ、空は有馬を私にも紹介してへんのに、九州の私の実家に連れて行こうとしたんやろか？

私に合わせると言えば、有馬から断られる。

祖母の家に行く事で、段階を経たんか。

それに、一泊旅行をして、深い仲になる決意をしていたのかも知れへん。

そやから、有馬に九州行きをキャンセルされて逆上したのやろ）

夢は頭の中で死の真相を思い巡らしていた。

「と言う事は、僕が九州行きをキャンセルした事が、空さんを暴走させたと言う訳か」

「まあ、そう言う事やな」

「九州行きをキャンセルする事って、そんなに怒りを買う事かなあ」

「あんたは女心がわからない人やな。

空は九州行きに人生を賭けとつたんよ」

「それだったら、空さんを死に追い込んだ責任は僕じゃないですか」

「そつや、あんたや。どう責任を取るつもり」

「お母さん、僕はいつたいどうすればいいのでしょうか」

「そっやね・・・」

「・・・」

「私の言う通りにする事やな。」

そうすれば、あれが事故じゃなかったって警察で騒いだり
せえへんから」

「わかりました。何でもお母さんの言う通りにします」

「聞き分けのええ子やな。お利口さん。それでええんよ」

夢は幼子を扱うかのように満の頭を優しく撫で撫でした。

「私の言う事はいはいと聞けばええんよ。ええ子でいてや。
悪いようにはせえへんから」

「はい、ママ」

「ええ子やで。ええ子やな。それでええんよ。」

空、有馬さんはええ子やで。

とつても聞き分けのええお利口さんやで」

夢は満の頭をもう一度撫で撫でし、満の頬に自分の頬を摺り
寄せた。

満が帰りかけようとすると、夢が声を掛けた。

「有馬さん、空のブログは見た事あるん？」

「空さん、ブログをしていたのですか？」

「見たってな」

夢はブログ名を書いたメモを満に手渡した。

「わかりました。家で見てみます」

「それから、携帯の番号とメールアドレスを教えてください。
また、連絡するよって」

満は携帯の番号とメールアドレスを書いたメモを夢に渡すと帰って行った。

夢は玄関から満の後ろ姿が小さくなるまで見送っていた。

「あれは、無理心中やったんか」

「何で、一緒に死んでやらのや」

「情の無い男やな」

夢が満の後ろ姿に向って小さく囁いた。

2話 娘の日記

夢は娘の日記を見詰めていた。

空は遺書を残してはいなかった。

恐らく、有馬が九州行きをキャンセルした時、咄嗟に死を決意したのだろう。

有馬を同級生だった和久咲きには渡したくない。

それで、有馬と無理心中を図ったのではないだろうか。

空の日記は咲きを見かける前後から、綴り方が急変している。

咲きに会うまでは、毎日あった事や、取り留めない事を書き綴っていたのが、それ以後は全く違っていた。

空が咲きに会った前日。

今から1カ月程前の日記には、次のような事が綴られていた。

明日は満と久し振りのデートだ。

嬉しい。

もう3年も付き合っているのに、満はプロポーズを
いっこうにしてくない。

なぜ？なぜ？なぜ？

男でしょう。

お願い！勇気を出して。

プロポーズの言葉はもう考えているの？

何て言うのかな。

た・の・し・み！

そして、問題の咲きに会った日の日記。

この日から娘の日記は言葉遣いが今までと激変している。

信じられへん。

こんな事があってええの。

デイトをドタキャンして、別の女とデイトするなんて畜生！

満の馬鹿野郎。いや大馬鹿野郎。

仕事だというから我慢をしているのに、ふざけるな！

街をぶらぶらしていると、満が女と飲み屋から出て来た。

夜の11時過ぎに。

くそつたれが！

その女、誰やと思う？

小学・中学の同級生の和久咲きや。

落ち零れの咲きや。

よりによって昔の同級生とデイトするんか。

なんでやねん。

余りに悔しいから満に電話をしたら、咲きは職場の同僚で

仕事が終わりに軽く酒を飲んでいたとの事。

こんなことって、あつてええの。

悔しい。惨め。

腹の虫が治まらへん。

ぶっ殺してやる!!!

夢は娘の日記をもう一度読み直し、娘が咲きに会ってから死に至る迄を自分なりに思い描いてみた。
それは、こうだった。

例の日から1週間後、空は咲きに電話をした。
二人は仕事を終えてから喫茶店で待ち合わせをした。

「久しぶり。元気？」

咲きが先に来ている空に声を掛けた。

「元気よ。急に電話をして許してねん」

空が笑顔で答えた。

「びつくりしたわ。松坂さんから電話があるなんて。何年振りかしら。」

何か私に用事でもあったの？」

「1週間程前に街で見かけたんよ。それで、電話をしようと思ってん」

「そうなんだ」

「夜の11時頃、男の人と二人やったやろ」

「1週間程前ね。あつ、あの人は職場の同僚よ。仕事が終わって少し飲んでいたのよ」

「偶然つてあるもんやね。あの人、うちのフィランセやねん」

「えつ、有馬さんが松坂さんのフィランセ。本当なの」

「本当や。だから、和久さんに知らせなあかんと思てな」

「それで、電話してきたのか」

「そや。あとで揉めるのんいややろ」

「そう言う事か」

空が咲きに電話をしたのは、有馬には手を出すなと言う事だったのだ。

それ以来、咲きは満を意識するようになった。

そのあくる日、咲きは有馬を昼休み喫茶店に誘い出した。

「昨日、松坂さんと会ったけど、有馬さんて松坂さんのフィランセなの？」

満は空と咲きが小・中学の同級生だと知って驚いていた。

「空とは大学時代から付き合っているのは本当だけど、結婚の約束をした覚えは無い」

満は困惑した顔で言い訳をした。

空は満と咲きの話の内容を

「職場の同僚に変な事は言ってくれるな」という

満の電話で知ったのだろっ。

それから数日後。

空の携帯に咲きから写真とメールが送信されて来た。
写真は満と咲きが仲良くVサインをしている写真だった。

メールには

いま仕事が終わって有馬さんと飲んでいまっす。
キヤッ！嫌だ。

有馬さんはキス魔だ。
誰か助けて〜。

咲き

とあった。

時間を見ると10時40分だった。

その時の空の気持ちは日記を見れば手に取るようにわかった。

くそっ、頭に来た！

「今度は時間通り7時に行って、必ず前回の埋め合わせをするから満、そう言ったん忘れたんか。」

一度ならず二度もデイトをドタキャンするやなんて。

ええ加減にしろ。

しかも、満はまた仕事のあと咲きと飲み屋へ。
うちを1時間以上待たせやがって。

こん畜生？

絶対に許せへんから。

ピストルがあれば満と咲きを本当にぶっ殺してやる。

バスーン。

死ね！

空の日記にはそう綴られていた。

怒りが収まらない空は、また咲きを前の喫茶店に呼び出した。

「あんた、満に手を出すな言ったん忘れたんか」

咲きが椅子に座るや、いきなり空が怒りを吐き出した。

「覚えてるわよ。」

でも、有馬さんは松坂さんの男というどんな証拠があるの」

「証拠やて。」

満は大学時代からうちの男や。みんな知ってるわ」

「そうかしら。松坂さんの一人合点じゃないの」

「うちの一人合点やて」

「有馬さんは昔の女と思っているみたいよ」

「なんやて」

「うちが昔の女やて」

「いいもの聞かせて上げましょうか」

咲きはバッグの中からICレコーダーを取り出した。

「私、先日有馬さんと飲んだ時、これをバッグに忍ばせて秘密に録音したのよ。聞いてみて。面白いわよ」

「なんや、それ」

「松坂さんと私のどちらが好みかを有馬さんに聞いてみたのよ。答えは有馬さんご自身から聞いてみて」

「松坂さんなの？」

「ううん、難しいな。空は大学時代からの友達だよ。昔は恋人だったけどね」

耳覚えのある声が二人の耳に聞こえて来た。

「じゃ、どちらが好みなの？」

「やっぱ、咲きちゃんかな」

「どうして私なの？」

「ううん、そうだな」

「話が合うからかな」

「昔は恋人だったけどね」

空は満の言葉を心の中で反芻した。

満の本心を知った時、空ははらわたが煮えくり返る思いがした。

そして、唇を噛み、悔しさの余りぶるぶると震えていた。

「この尻っ、人の男に手を出しやがって」

空はいきなり咲きの顔目掛けて冷めかかったコーヒーをぶっ掛けた。

「何するの。このガリ勉女が」

咲きはテーブル越しに空の顔を思い切り平手で叩き返した。

バシーン。

二人は襟ぐりを鷲掴みにして取っ組み合いを始めた。

二人の異変に気が付いたウェイターが慌てて止めに入った。

こんな事があってから、娘は有馬との結婚を急ぎ、最後の手段として九州行きを決めたのだろう。

そして、有馬が急に九州行きをキャンセルしたものだから、有馬との無理心中を咄嗟に決断したに違いない。

（有馬と一緒に死んでいれば、まだ娘は浮かばれたのかも知れへん。

そやけど、有馬は奇跡的に一命を取り留めた。
これでは、娘は浮かばれへん。
さぞや、無念やったやろ

（空！これでは悔し過ぎて成仏できんやろ）

夢は日記を読みながら娘の辛い心情を思いやった。
そして、娘の意思を自分の心の中にしっかりと宿した。

（よし、こうなったら・・・）

（空の思いは私が受け継いだる。
必ず、受け継いだる。
安心しーや）

夢は目を閉じて心の中で誓った。

3話 鳥のブログ

満は仕事を終えて家に帰るとパソコンを開いた。
生前、空はブログをしている事を満には言わなかった。

「なぜ、言わなかったのだろう」

満は独り言を言いながら空のブログを開いた。

ブログ名は

あの空のどこかで。

ピーカンの空に一羽の鳥が飛んでいる写真。

その下にちょっとした文章が書かれている。

その文章に満は目を通した。

晴れ渡った空の向こうには何があるのかしら。

涙

それとも

幸せ。

怒り

それとも

笑い。

嫉妬

それとも

略奪。

あの鳥は私かも知れない。

もし、あの鳥が私だったら

あなたはこうするの？

「これが空のブログか。

しかし、意味深なブログだな」

満は空のブログを見ながらほんの少し首を傾げた。

「空は死を予感していたのだろうか？」

「万一の時は死を覚悟していたのではないだろうか？」

「このブログは俺宛に書かれたものだろうか？」

満は空の心の闇を垣間見る思いがしていた。

満はコメントを入れたい衝動に駆られていた。

そして、その衝動のままに返事も出来ない人にコメントを入れた。

鳥は君かも知れない。

そして、君を鳥にしたのは僕かも知れない。

済まない。

安らかに眠っておくれ。

満月

コメントを入れ終わると、満は両手を合わせた。

（済まない。

安らかに眠っておくれ）

満は心の中で小さく囁いた。

ある日、満はJR野田駅のすぐ近くにあるアイデア印刷に向っていた。

アイデア印刷は中堅の印刷会社で、駅前のオフィスに企画制作室が、駅から徒歩10分位の所に印刷工場があった。

エレベータを待っていると、後ろから来た制作課長の井沢が満に声を掛けて来た。

「あれ、ええのが出来そうか」

「あつ、課長お早うございます。」

ええ、面白いのが出来そうです」

「有馬ちゃん。あれは交通広告社との競合プレやから、絶対に負けれへん。頼むで」

「わかりました」

コピーライターの満は、いまB全駅張りポスター3点シリーズと中吊り3点シリーズを受け持っていた。

コンビを組んでいるのは、グラフィックデザイナーの咲きだ。

その日の夕刻。

満は会議室に咲きを呼んだ。

「今日は課長から発破を掛けられたよ」

「へえ、そうなの。彼、心配性だから」

「競合だから仕方が無いよ」

「いいアイデアは出た？」

「2案考えたので、和久さんの意見も聞こうと思ってね」

「JR近畿の京都の宣伝よね。」

今までにいろいろ宣伝されているから目新しいもので無くちゃね」

「そう、そこが頭が痛い所だよ。」

まあ、僕なりに自信はあるんだけどね」

「わあ、楽しみ。早く見せてよ」

「わかったよ。今見せるよ」

満は原稿用紙に書いたコピーを咲きに見せた。

1案目のキャッチフレーズは

故郷にお帰りやす。

旅人が舞妓の姿に扮装して3つ名所旧跡を訪ねる。

おおきに、東京から来た愛奴どす。

それぞれの案には、旅人のセリフをサブキャッチに使用する。

2案目のキャッチフレーズは

また旅 京都

これも3点シリーズで、

1作目は 舞妓さんが舞妓姿の上に三度傘、かつぱ
小さく祇園の風景

2作目は お坊さんがお坊さんの衣装の上に三度傘、かつぱ
清水寺

3作目は お母さんらしき人が裸にタオルを巻いて頭に桶、
かつぱ 嵐山温泉

満は原稿用紙を見ながら2案を咲きに説明した。

「1案目はよくある手ね。舞妓さんを外人、例えば黒人、白人、
日本人の舞妓さんにすれば面白いかも」

「さすが、デザイナー。鋭いなあ」

「やっぱり、私は2案目がいいと思うなあ」

「僕も同じだよ。」

じゃ、ラフは申し訳ないけど2案書いてもらえる」

「了解。面白いプレゼンになりそうね。さすがね。」

私あなたのアイデアとセンスにめろめろよ」

「ありがとう」

「どう、今日は前祝に二人で飲みに行かない？」

「行きたいのだけど、今日はやめとくよ。」

片付けてしまわない仕事がいるいろあつてね」

「人気者は辛いわね。じゃ、またね」

満はその日、夜遅くまで掛かって溜まっている仕事を片付けた。

仕事を片付け終え、パソコンを開じるのを思い直して、何気無く空のブログを見た。

「ええっ!!」

そんな馬鹿な」

満は空のブログのコメントを見て、あっと驚いた。

4話 最高の記憶

満は空のブログに目が釘付けになっていた。

何と、返事のないはずの空のブログに、返事が書かれていた。

「信じられない」

満は驚いた顔をして呟いた。

満が書いた書き込みの下に次のようなコメントが書き加えられていた。

コメありがとう！

うちの思った通りやわ。

う・れ・し・い。

安らかに眠っておくれやて

そんなん無理やん。

なぜやて？

・の事が気になるもん。

ブルースかい

コメントは関西弁で書かれている。

空は生前、関西弁と標準語を使い分けていた。親しい人や嬉しい時、悲しい時は関西弁。それ以外は関西アクセントの標準語を使っていた。

満へのメールは関西弁だった。

この書き方は空が書いたように思える。

なぜなら、う・れ・し・いという使い方。

空は本当に嬉しい時などに良く使っていた。

「いったい誰が書き込みをしたのだろう」

「空か？まさか、そんな事があるはずがない」

「じゃ、誰が書き込みをしたのか？

空の母親か？それとも、他の誰かか？」

「他の人間では無理だ。じゃ、母親か？」

「母親に会って確かめてみたい」

書き込みの相手を満は必死で思い巡らしていた。

そして、満は空の母親の夢に会いに行こうと思った。

あくる日、仕事が終わると、満は空の母親を訪ねた。

「あら、有馬さん。ちょっと待ってや」

「お母さんに少し聞きたい事がありまして」

「ここではなんやから中に入ったら」

「じゃ、お邪魔します」

満は居間に通され、応接ソファーに腰を下ろした。

「聞きたい事って何なの？」

「実は、空さんのブログなんです」

「空のブログ見てくれたんか。あの子、きっと喜んでるわ」

「見たんですが。少し腑に落ちない事がありまして」

「何があったんや」

「僕がブログにコメントを入れたら、驚く事に返事がありましたね」

「私、ブログの事はようわからんけど」

「ブログはされないのですか？」

「私はパソコン音痴やからな。」

「ブログなんてちんぷんかんぷんやわ」

「そうなんだ」

満は母親の言葉を半信半疑で聞いていた。

（と言う事は、コメを書いたのは母親じゃ無かったのか。
それとも、嘘を付いているのか）

満は探りを入れるためにさらに質問を入れた。

「パソコンは全くされないのですか？」

「私はパソコンと言う言葉を聞いただけで頭がパニックを起すんですよ。だから、パソコンの事はみんな空に任せっぱなし。これからは有馬さん面倒みてな」

「まだ、若いのに珍しいですね」

（空の母親は46、7歳だろう。

まだ若いのに本当にパソコンは全く駄目なのだろうか？

本当だとしたらコメを入れたのは母親じゃない。

空か？そんな馬鹿な！）

満は心で独り言を呟きながら、首を傾げていた。

「じゃ、ブログのID番号やパスワードは聞いておられないですよ
ね」

「ID番号、パスワード？いったい何の事やの」

「ああ、それでは結構です」

（母親は本当に知らないようだ。

嘘を付いているようには思えない。

コメを入れたのは母親じゃ無かったのか）

満は勘が外れたので少し落胆をしていた。

（じゃ、いったい誰だ）

満が考え事をしていると、夢の声がそれを遮った。

「何をぼけ～としてるんよ」

「ああ、すみません」

「そんな事どうでもええやんか。それより、お酒でも飲めへんか」
「僕はこれで失礼しますから」

「あんた、私との約束忘れたんか。」

先日、何でも私の言う事を聞くと云うたやないか」

「あの時はそう言いましたけど」

「なら、少しだけ付き合つてえな。」

夫と離婚したし、娘を亡くしてからは一人ぼっちなんよ。

あんた、責任を取る言つたやろ」

「わかりましたよ。飲めばいいのでしょ」

満は渋々、夢の酒の相手をする事にした。

夢はみるみる上機嫌になって1升瓶を持って来た。

「お酒でもええか」

「ああ、頂きます」

「私は冷が一番好きやねん」

酒の摘みに竹輪とさきいかがテーブルの上に並べられている。

夢はさきいかをかじりながら酒を飲んでいる。

コップ酒を半分位、夢は一気に飲み干した。
いい飲みっぷりだ。

「一人で飲んでもいつも面白あれへん。相手が欲しかったんよ」
「いつも一人で酒を飲んでいるのですか？」

「そうや。一人で飲んでるんよ。寂しいで〜」
そう言つと、今まで陽気だった夢が悲しそうな顔をし出した。

「空が死んでしもたやろ。寂しいて。寂しいてなあ」
そう言つて、夢はポロポロと涙を流し出した。

「有馬さんも空が死んで寂しいやろ。
今日は一緒に泣こな。ううう、ううう・・・」
空は酒を飲んで涙を零している。

（お母さんは泣き上戸だったのか）

満はしきりに泣いている夢を見て、そう思った。

「空が可愛そうで。可愛そうで。
有馬さん、そう思えへんか」
「本当にそうですね」

「有馬さんもそう思ってくれるか。空、良かったな。
有馬さんはええ人や。ううう、ううう、ううう・・・」

満は夢の悲しそうな顔を見ると、自分も悲しくなり、もらい泣きを始めた。

「空さん、何で死んだのですか？ううううううう・・・」
「空、空。私より先に死ぬなんて。ううう、ううう・・・」
二人は酒を飲んで泣き、泣いては酒を飲んだ。

飲みなれない日本酒を早いピッチで飲んだせいか、満は深い酔いに襲われていた。

「ぼ、僕、こ・れ・で・失礼・し・．．．」

満は立ちかけたが、がくつと崩れ、膝を突いてしまった。

「あら、凄く酔っっているやないの。それで、帰るのは無理やわ。泊まった方がええわ」

「大・大丈・夫・．．．」

「大丈夫やあれへん。泊まっていき」

「大・丈・．．」

夢は満の肩を抱えながら空の部屋に満を連れて行った。

「空のベッドでお休み」

夢は満の上着とズボンを脱がせ、Ｔシャツとパンツにした。そして、満を空のベッドに寝かせた。

「空、嬉しいやろ。今日は有馬さんに抱いてもらい」

「．．．」

満は夢に返事をする気力も無かった。
間もなく、満は深い深い眠りに落ちて行った。

「有馬さんとHしてもかめへんで」
「・・・」

そう言つて、夢は部屋から出て行つた。

1時間後、夢は空の部屋に入つて来た。

スースー。

「寢息を立ててよう眠つてはるわ」

満は酒に酔つて熟睡している。

夢はベッドを覗き込み、そしてその横に正座をした。
そして、毛布の中に手をするすると滑り込ませた。

ボクサーパンツのごわごわした感触が夢の手の平に伝わつて来た。

満の顔を覗く。

スースー。

満は気持ち良さそうに眠っている。

夢は満自身をごわごわした感触の上から擦つた。

何度も何度も。

「空と夢の中ですねよ」

「ええ子ね。ええ子よ」

「激しく激しく抱いてもらい」

「ああ・・・」

「ああ・・・」

満は夢の中で果てた。

「空っ、良かったやろ」

満の顔を見ながら夢が呟いた。

夢が出て行って、暫くして満は股間の感触の悪さで目を覚ました。
股の辺りに手を当てると、手がべたつべたつと濡れている。

「そう言えば、夢の中で女を抱いていたっけ」

「あの女は誰だったのか？」

「空か」

「それとも、別の女か」

満は夢の中で抱いた女の顔をよく覚えてはいなかった。
ただ、今までに経験した事の無い最高の果て方だけははっきりと記

憶に残っていた。

5話 二人の彼女

あくる日、満は仕事を終えてぼんやりとパソコンを見ていた。手が自然と空のブログを開く。

空の返事に、また返事を書くべきか満は迷っていた。が、返事をして、次の反応を見たいと言う誘惑が大きな波のように押し寄せて来た。

満は誘惑に負け、キーボードを叩いた。

君は誰だ。

彼女はこの世界にはいない。
いったい君は誰なのだ！

満月

コメントを入れて30分程して、満はもう一度空のブログを開いてみた。

「ええっ！嘘っ！」

思わず、満は画面に向って短い言葉を発した。
そして、信じられないと言う顔をした。

30分程の間に返事が入っていた。

そこには、次のようなコメントが書かれていた。

大学時代から恋人の・を忘れんとして。

住む世界が違うやて。

ほんま、悲しいなあ。

こっちに来て、気持ちはいっつも変らへん。

ええ事教えてあげよか。

このブログに遊びに来れば会話OK。

愛の告白も大歓迎。

た・の・し・み。

先輩！あの女と浮気したら承知せえへんで。

ブルースかい

満は画面から目を離す事が出来なかった。

「死んだ人間がコメを書く事が出来るなんて・・・」

「そんな馬鹿な！」

満が人に聞こえるような大きな声で独り言を呟いた。

顔は蒼ざめて引きつっている。

制作課長の井沢は満の異変に気が付き、そばに近付いて来た。そして、パソコンの画面を満の肩越しにじっと覗いていた。

「どうしたんや、有馬ちゃん」

「あつ、課長。別に何もありません」

「顔が真っ青やで」

「本当になにもありませんので」

「それやったらええけど」

有馬は満が見ているブログ名をしっかりと見届けると席に戻った。

席に戻ると、井沢は大急ぎで満が見ていたブログをパソコンの画面に映し出した。

『死んだ人間がコメを書けるなんて・・・』

『そんな馬鹿な!』

井沢は満の独り言を思い出しながら、そのブログを熱心に見詰めていた。

次の日の昼休み、満は空のブログに大きな力で引き寄せられて

いた。

「コメを書いたのは空なのだろうか」

「そんな事があっていいのだろうか」

満は画面を見ながら独り言をぶつぶつと呟いていた。
そこへ、咲きが現れた。

「お昼、一緒に食べない」

「悪い、一人で行ってくれないか」

「松坂さんが死んでからあなた少し変よ」

「そうかな」

「そうよ。死んだ人がそんなに気になるなら、私もいつそ死んでしまおうかな」

「冗談を言つなよ」

「本気よ」

意味深な言葉を残して咲きは去って行った。

「和久さんまで死ぬだって。悪い」冗談はよせよ」

満は理解出来ない精神構造を持つ二人の女性にかなり苛立っていた。

数日後、同僚の送別会が中華料理店で行われた。
カメラマンの立原は東京で仕事をするらしかった。

型通りの送別会は終わり、そこから自由解散になった。
二次会に行く者もいたが、満はそんな気にならず、そのまま家に帰るつもりだった。

「どう、私と飲みに行かない」

咲きが声を掛けてきた。

「今日は止めとくよ」

「ボトルをキープしている飲み屋があるの。
一人では行きにくいの。」

お願いだから付き合ってよ」

「悪いが、またな」

「まだ、死んだ女に義理立てしているの？」

「そう言うわけじゃないけど」

「じゃ、どう言う訳よ。いつまでそんな女の事でうじうじしているの」

咲きがきつい顔をして突っ掛かって来た。

「今日はそんな気になれないんだ」

「それなら、いっそ死んだ女と飲んで上げなさいよ。
仏壇の前で線香でも肴にしてね。」

さぞかしうまい酒が飲めるわよ」

「じゃ、お言葉に甘えてそうさしてもらっよ」

「いつまで亡霊に取り付かれてるの。」

目を覚ましなさいよ」

「そんなのじゃないよ」

「弱虫！」

咲きはあきれたような顔をして満の後ろ姿を呆然と見送っていた。

その時、ぽんぽんと2回咲きの肩を軽く叩く者がいた。
振り返ると、井沢課長が立っていた。

「俺と飲みに行かへんか？」

「課長とですか？」

「そや。有馬ちゃんの事で面白い話があるんや。それを肴にして飲む
と言っのはどうや」

「面白い話と言っのは何ですか？」

「立ち話も何やから、腰を下ろしてから話たるわ」

「わかりました」

二人は咲きの行き付けの飲み屋に行った。

井沢はばついで、前々から咲きに興味を持っていた。

咲きは満に関心があったので、今まで井沢とはプライベートな付き
合いは避けていた。

咲きの行き付けの飲み屋はカウンターだけの小さなスナックで、ママの作る手料理が評判の店だった。

「課長、面白い話って何ですか？」

「そう慌てんでもええやろ。まずは一杯飲ませろや」

そう言っただけ井沢はウイスキーの水割りをうまそうに口に流し込んだ。

「話ちゅうのはブログなんや」

「ええ、ブログですか？」

「最近、有馬ちゃんがブログを見ては蒼い顔をしているのに気が付かへんかったか」

「そう言えば、変に真剣な顔をしてパソコンを見ている事が多いですよ」

「先日も独り言をいいながら、真つ青な顔をしていたで。何と言ったと思う」

「何と言ったのですか」

『死んだ人間がコメを書く事が出来るなんて・・・』

『そんな馬鹿な！！』

「確かそんなように言ってたと思うわ」

「へえ、そんな事を言ったのですか」

「意味のわからん事をぶつぶつと言ったで」

「課長、そのブログ名はご存知ないですか？」

「知ってるで」

「教えて下さい」

「ただでは、教えられんへんな」

「どうすれば教えてもらえますか？」

「一緒に泊まってくれたら教えたるわ」

「ええっ、泊まる。そんな・・・」

「嫌なら教えられへんな」

「・・・」

咲きはどうしようか必死で思案していた。

（泊まりたくない。

でも、ブログ名は絶対に知りたい）

ブログ名を知りたいと言う気持ちだが、泊まりたくないと言う気持ちを押さえ込みにした。

「先に教えてもらえますか？そうすれば泊まる事を約束しますから」
「絶対に約束を守るるか」

「守ります」

「よっしゃ。これで交渉成立や。教えたるわ」

「待って下さい。メモりますから」

咲きはバッグの中から手帳を取り出した。

「どうぞ」

「ブログ名はな。あの空のどこかでや」

井沢は手帳を見ながらブログ名を空に教えた。

（松坂さんのブログかも知れない。

確か、松坂さんの名前は空だった。

きつと、そうだ）

「こっちの約束は果たした。

次はそっちの約束を果たしてもらおか」

井沢はさつさと会計を済ませて外に出た。

咲きは井沢の後に渋々従った。

二人は派手なネオンがちらつくホテル街に足を入れた。

「ほな、入るか」

井沢は咲きの手をしっかりとつかんだ。

咲きはホテルの前で足が立ちすくんでいた。

6話 ブログの正体

井沢は咲きの手を引つ張りながらホテルに入った。
部屋に入ると、井沢は咲きを抱き寄せようとした。
咲きは後ずさりして井沢から素早く逃げた。

「嫌だ。課長、汗臭い！
まず、シャワーをしてもらえませんか？」
「悪い、悪い。急いでシャワーをするわ」

井沢は袖口の辺りをくくんと嗅ぎながら罰の悪そうな顔をして浴室に入って行った。

咲きは例のブログの事が気になっていた。

（例のブログは松坂さんのブログなのだろうか。
それとも、別の誰かが書いたものだろうか。
一刻も早く確かめたい）

咲きはメモに急いで走り書きをした。

課長、すみません。
ブログの事が気になりますので
これで失礼します。

咲き

メモをテーブルの上に残すと、咲きは走って部屋を出た。

井沢は大急ぎでシャワーを済ませた。

「お待たせ」

井沢が浴室から出て来た。

「和久君も入っというで」

バスタオルを体に巻きながら、上機嫌で井沢が咲きに声を掛けた。

「・・・」

返答が無い。

ホテルの一室には自分以外、人の気配は無かった。

「まさか、帰ったんか。」

それは無いで」

井沢は狐に摘まれたような顔をして、周りを見渡した。

テーブルの上の咲きが書いたメモが目の中に飛び込んで来た。

メモを急いで読んで、思わず井沢はそれを破り捨てた。

「畜生！今度こそは・・・」

井沢は冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、ひと息で飲み干した。そして、空き缶を力任せに握り潰した。

走って広い通りに出ると、咲きはタクシーを拾った。

「早くブログを確かめたい」

咲きは1分でも早くブログを確かめたい衝動に駆られていた。

自宅に帰るのもどこかしく、JR野田駅のすぐ近くにある会社にタクシーで戻った。

制作課の自分のデスクまで走って行くと、咲きは大急ぎでパソコンを起動した。

ブログ名を手帳で確かめ、そして、アクセス。

ブログが画面に登場するまでの時間が途方も無く長く感じられる。

ブログが画面に現れた。

「これか！」

咲きは画面を思わず凝視した。

あの空のどこかで

ピーカンの空に一羽の鳥が飛んでいる空のブログが姿を現した。

咲きは写真の下の記事に目をやった。

晴れ渡った空の向こうには何があるのかしら。

涙

それとも

幸せ

怒り

それとも

笑い

嫉妬

それとも

略奪

あの鳥は私かも知れない。

もし、あの鳥が私だったら

あなたはどうするの？

咲きは何度も何度も文章を読み返した。

「このブログは松坂さんのブログなのかしら？」

咲きは考えながら、文章のある部分に注目をしていた。

それは、

嫉妬

それとも

略奪

という一節だった。

「松坂さんは同級生だった私に嫉妬し、有馬さんを自分の者に出来ないと悟ったとしたら・・・」

「略奪しようと考えてても可笑しくない」

「問題はどう略奪するかだ」

「もし、生きていては勝負にならないと考えたなら・・・」

「無理心中をしたいと考えても不思議ではない」

「そして、わざと交通事故をして有馬さんの肉体を永遠に略奪しようとした」

「もし、私の推理が当たっているとしたら、松坂さんとは何と恐ろしい女なのだろう」

「許せない！絶対に奪ってやる」

咲きは独り言を呟きながら文章の下のコメントに視線を移した。

鳥は君かも知れない。

そして、君を鳥にしたのは僕かも知れない。

済まない。

安らかに眠っておくれ。

満月

「有馬さんのコメントだ。

きつと、そうだ。

満月の名は満からもじったものに違いない」

「有馬さんは死んだ女性、つまり松坂さんに宛ててコメントを書いたのだ。

なぜ、死人にコメントをしたのだろう」

「済まない。安らかに眠っておくれと

コメントしたのは有馬さんだけが命を取り止めたからに違いない」

「やっぱり、このブログは松坂さんのブログだったのだ」

咲きは満のコメントを見て、これが空のブログであると推測した。

そして、満の下のコメントを見て、咲きはギョツと驚いた。

そこには、次のようなコメントが綴られていた。

コメありがとう。

うちの思った通りやわ。

う・れ・し・い。

安らかに眠っておくれやて。

そんなん無理やん。

なぜやて？

・の事が気になるもん。

ブルースかい

「嘘っ!？」

コメントを読んで思わず咲きは声を上げた。

「これは松坂さんからのコメントではないか」

「信じられない!こんな事ってあっていいの!」

咲きは驚きながら続くコメントにも目を通した。

君は誰だ。

彼女は这个世界にはいない。
いったい君は誰なのだ。

満月

その下には、驚く事にまたまた返事のコメントが入っていた。

大学時代から恋人の・を忘れんとして。
住む世界が違うやて。
ほんま、悲しいなあ。

こっちに来て、気持ちはいっつも変らへん。

ええ事教えてあげよか。

このブログに遊びに来れば会話OK。

愛の告白も大歓迎。

た・の・し・み。

先輩！あの女と浮気したら承知せえへんで。

咲きはコメントを読みながら、満の独り言を思い起こしていた。

『死んだ人間がコメを書く事が出来るなんて・・・』

『そんな馬鹿な!』

（有馬さんはこのブログのコメントを読んで思わず人に聞こえる位の声を出した。

それを井沢課長が聞きつけて変に思った。

なぜ、それ程驚いたのか？

死んだ人間。

つまり松坂さんから返事のコメントが入ったからではないのか。そうだ。きっと、そうに違いない）

「という事は、このブログは松坂さんのブログに間違いない」

「しかし、松坂さんはすでに死んでいる。

有馬さんのコメントに返事を書けるはずがない」

「では、返事を書いたのはいったい誰なのか？」

誰もいない制作課の一室。

咲きが独り言を大きな声で呟いた。

思い当たるのは空の母親しかいなかった。
咲きは中学校の同窓会の幹事をしている友人から空の実家の電話番号を聞き出した。
はやる思いを抑え、咲きはその番号に電話を入れた。

「もしもし、中学校の時、同級生だった和久です。
覚えてらっしゃいますか？」

「ああ、和久さんやね。よう覚えてるわ。
何か、用事？」

「松坂さんのブログを見たいのですが。
ブログ名を教えてくださいませんか？」

「ブログ？」

「ブログって何やの？」

「ブログをご存知ないですか？」

「何の事や。」

私にはさっぱりわからへんわ」

「お母様はパソコンをされないのですか？」

「パソコンは空に任せっぱなしやったからな。」

私はパソコン音痴で、パソコンを見るだけで頭が痛くなるんよ」

「そうなんですか。」

なら、結構です」

「役に立たんとご免やで」

「いいえ、ありがとうございます。
突然、お電話しましてお許し下さい。

お母さんも松坂さんを亡くされて気を落とされませんように。
では、これで失礼します」

「さいなら」

「ツーツー」

電話が切れた。

「何や。恋敵が。

あんたのせいでうちの娘は命を亡くしたんや。

この仇はきつと私が取つたる。

有馬さんは絶対にあんたにだけは渡せへんからな。

覚えときや」

夢は電話機に向って大声を上げ、力任せに受話器を電話台に置いた。

ガチャン。

腸が煮えくり返る思いを、夢は中々抑える事が出来なかった。

「お母さんじゃ無かったのか」

咲きは勘が外れ、呆然としていた。

「じゃ、誰よ。誰なのよ」

「死んだ松坂さんがコメントを書いたとても言うの。そんな馬鹿な話があつていいの」

「待てよ。松坂さんのブログには確か先輩！あの女と浮気したら承知せえへんどあつたわ」

「松坂さんは有馬さんの大学時代の後輩だし」

「あの女とは私の事か」

「松坂さんは私に有馬さんを取られなくなかった」

「3人の関係を知っているのは松坂さんしかない」

「と言う事は・・・」

あれをコメントしたのは死んだ松坂さんなのか」

咲きはいろいろと思い巡らし、意外な事を口走っていた。

「そう言えば、松坂さんはいじめっ子だったわ。死んでも、私をいじめたいのかわ。きつと、そうに違いない」

咲きは空にいじめられた過去の日々を脳裏に思い起こした。そして、あの頃抱いていた彼女への感情を呼び覚ましていた。

7話 偶然の悲劇

空と咲きとは小学校・中学校の同窓生だった。二人の関係がもつれたのもこの頃からだった。

咲きは小学校4年の頃のある出来事を思い起こしていた。

その頃、空は成績がクラスで一番良く出来ていた。

咲きは勉強が嫌いで授業中も絵ばかりを書いていた。それで、成績も余り出来なかった。

ある時、算数の試験が行われた。

「みんな良く頑張ったわね。」

このクラスには100点の生徒がいるのよ。凄いでしょう。

でも、残念なのは0点の生徒もいる事ね」

担任の進藤先生が答案用紙を見ながら生徒に向って語り掛けた。

「100点の生徒がいるのよ」

先生のこの言葉を聞いた時、生徒達の間から

「凄いな」

「松坂やろ。あいつに決まってるわ」

こんな言葉と共に羨望の歓声が上がった。

「残念なのは0点の生徒もいる事ね」

先生のこの言葉を聞いた時、

「誰や」

「信じられへん」

「かつこわりい」

これらの言葉と共に、どつと歓声と笑い声が上がった。

100点を取ったのは松坂空だった。

和久咲きは0点と赤で書かれた答案用紙を沈んだ表情で眺めていた。

空が近寄って来たと思うと、咲きの答案用紙をさつと取り上げた。

空は一番後ろの席に座っている井上武の所まで走って行った。

そして、彼の机の上に答案用紙を置いた。

「返して」

「返して」

咲きは泣きじゃくりながら空の後を追っ掛けていた。

武は驚いた顔をして答案用紙を見詰めていた。

「何や、これ」

「咲きの答案用紙や。0点は咲きやってん」

空が咲きを指差しながら、意地悪な表情をした。

「0点は和久やったんか。お前、あほやな」

武は咲きの顔をじろじろ眺めながら呟いた。

「0点は和久やったんか。お前、あほやな」

武の言葉を聞いて、咲きは心の中でポロポロと涙を流した。空は咲きの表情を見ながら薄っすらと笑みを浮かべていた。

咲きはわあわあ泣きながらその答案用紙を武からもぎ取った。

咲きはその頃、密かに武に淡い思いを抱いていた。

空も武の事が好きだった。

空は咲きの思いに気付き、彼女に憎憎しい思いを募らせていた。その感情が空をこんな行動に走らせた。

それ以来、武は咲きの事を0点と呼ぶようになった。

武から0点と呼ばれるたびに、咲きは空に激しい憎しみを抱くようになった。

中学校2年の時

この時も咲きは運悪く空と同じクラスだった。

咲きの成績は相変わらずだった。
が、授業中も絵ばかり描いているせいあって、絵の腕前はかなり上達していた。

美術の先生の勧めで咲きは絵のコンテストに応募した。
その絵が何と文部・科学大臣賞に輝いた。

全校生徒の前で校長先生から咲きは表彰状を渡された。
そして、その絵は学校の廊下に展示された。

咲きの名は全校中に知れ渡り、咲きは男子生徒のアイドル的存在になった。

咲きは男子生徒からの人気を一心に浴びた。

空は面白くなかった。

「授業も聞かずに絵ばかりを描いている落ち零れが血迷いやがって」

「男子生徒のアイドル。ふざけるな」

「絵が少し位うまいからって、つけあがるな」

空は咲きを心の底から罵った。

ある日、空は廊下に展示されている咲きの絵を睨み付けた。
そして、空は手に持っているナイロン袋を開いた。
その中には、拾い集めた犬の糞がいっぱいに入っている。

空は大きめのスプーンで糞をすくった。
それを、咲きの絵目掛けて投げ付けた。
糞は絵に当たって大半が下に落ちた。

「チエツ！」

思った通りに糞が絵に付かないので、空が舌打ちをした。

空は柔らかい糞を選んで、スプーンの裏に山盛りこびり付けた。
そして、その犬の糞を咲きの絵に擦り付けた。

何度も何度も。

「臭っさ〜」

「これで誰もこの絵には寄り付かんやろ」

「ええ気味やわ」

けらけらけら、けらけらけら・・・。

けらけらけら・・・。

糞にまみれる絵の前で空は笑い転げていた。
そして、空は一目散に走り出した。

こんな事があってから、空は来る日も来る日も猛勉強に励んだ。
絵の才能を持つ咲きに勝ち、見下す方法は成績しかない、空は考
えるようになっていた。

成績で見下げる事で、自分のプライドを保とうと空は必死で考えて
いたのだ。

空は中学校でも成績はクラスで一番になり、学年でも常に3番以内
に入るようになった。

咲きは授業中も絵ばかりを描き、成績は相変わらず良くなかった。

空は中学校をトップで卒業し、進学高校から国立大学に進んだ。
咲きはやっと事で公立の工芸高校に入り、卒業後グラフィックデザ
イナーの卵として現在の会社に就職した。

中学卒業後、進路が違ったため、二人が顔を会わせる事は無かった。

咲きは空の事も、空にまつわる思い出も、自分の記憶からは消し去
りたかった。

思い出すと、げえげえと反吐が出そうに思えたからだ。

空と小学校の時、同じ異性に思いを寄せた。

ただ、それだけの偶然で、咲きは空から敵意を剥き出しにされた。

同性を怖いと思った。

同性には気を付けねばならないと思った。

同性を憎いと思った。

同性を許せないと思った。

そして、

同性を地球上から抹殺したいと思った。

そんな思いが風化しようとしてい時、偶然にも空と出会ってしまった。

職場の同僚と仕事が終わリ、飲み屋で飲んだ帰り、二人でいる所を空に見られてしまった。

職場の同僚 有馬満。

何と、彼は偶然にも空のフィアンセだったのだ。

こんな偶然が現実にあつて良いものだろうか。

咲きは久し振りに会つた空から同僚との関係を聞かされた時、自分の耳を疑つた。

そして、これが事実だと認めた時、自分の内奥から不思議な感情が湧き上がつて来るのを感じていた。

「奪つてやる！」

「どんな手を使つても奪つてやる！」

「絶対に奪ってやる！」

心の底から搾り出すような声を咲きははつきりと聞いていた。

満を咲きはそれまでは意識していなかった。

コピーライターとグラフィックデザイナー。

異性というより、同僚、いや信頼できるパートナーと咲きは満の事を思っていた。

が、空のフィヤンセという勲章が満の胸に輝いた時、咲きはこの思いの舵を意識的に大きく旋回させた。

（奪ってやる！）

咲きは空と喫茶店で会った時、こんな激しい感情を心に宿した事を今はつきりと思い起こしていた。

「奪えたと思った矢先、あの女は死によって逆転を狙うなんて・・・」

「

「そして、あの世から男を取り戻そうとしている」

「なんて、執念深い女なのだろう」

「絶対に負けないから・・・」

咲きはブログのコメントを目で追いながら下唇を噛んでいた。

8話 敵は亡霊

咲きは空の少女時代の顔をはつきりと思い出していた。

（あの世に行っても、私に意地悪したいのだろうか）

咲きはブログを見詰めながら考えていた。

そして、ある事を思い付いた。

（ブログにコメントを入れて、二人の反応を見てやろう）

そう考えると、咲きは空のブログにコメントを入れた。

死んだ人間は墓の下でおとなしくしているものよ。

あの世の男でもくどきなさいよ。

この世の男にいくら言い寄っても無駄よ。
なぜって？

だって、あの世の女は

この世の男を抱けやしない。

墓の通行人

「どんな反応があるか楽しみだわ」

「死人からコメントがあつたらどうしよう」

「そんな訳ないか」

咲きはパソコンを見ながらぶつぶつと独り言を呟いていた。

プレゼンの期日が迫って来た。

あくる日、咲きは出社すると、すぐにポスターと中吊りの制作に取り掛かった。

そこへ井沢課長が現れた。

井沢は咲きの耳元で囁いた。

「なぜ、帰ったんや」

「・・・」

「約束したやないか。忘れたんか」

「いいえ」

「そんなら、埋め合わせをしてもらうからな」

「わかりました」

「わかってるのやったらええわ。また、連絡するわ。それは、そうと仕事の方はどうや」

「予定通り進行しています」

「そうか。このプレゼンは絶対に落とされへんからな。ええもん仕上げてや。うまく行ったら二人で祝いでもしようや」

「あつ、はい」

井沢は自分の言いたい事を言うと、さっさと自分の席に戻って行った。

B全駅張りポスター2案3点シリーズ計6点と、同じく中刷り6点のラフスケッチをプレゼンまでに仕上げなければならない。

「今日は徹夜で頑張らなくちゃ」

咲きはスケジュール表を見ながら頭で段取りを考えていた。

「どう、うまくいってる」

午後7時頃、満が咲きの机を覗きながら声を掛けた。

「今日は徹夜になりそうよ」

「余り、無理するなよ」

「ありがとう。そちらは」

「こちらも別の仕事で徹夜になるかも」

「無理しないでね」

「ありがとう。何かあったらいつでも声を掛けてくれ」

「困った事が出来たら相談にのってね」

「ああ、いいよ。じゃあな」

満の後姿に咲きは小さく声を掛けた。

「あなたは私のものよ。死人なんか絶対に渡さないから」

メッセージを目で送ると、また咲きは仕事に熱中し始めた。

午後11時過ぎ、咲きは満の所に行った。

満は疲れているのかソファーの上で眠っている。

咲きは満の寝顔をじっと見詰めていた。

「あなたは私のものよ」

咲きが声を掛けても、満はスヤスヤと眠っている。

咲きは満の唇に自分の唇を重ねた。

唇の柔らかい感触。

その後、

プーンと男の香り。

幸い制作室には満と自分の二人以外には誰もいない。

咲きはもう一度、唇を満の唇に近付けた。

その時、満の瞳がパチクリと開いた。

「やめないか」

満が咲きの体を突き放しながら叫んだ。

「どうして！」

「仕事中じゃないか」

「誰もいないわ」

「だからって」

「死んだ人に義理立てしているの？」

「そうじゃないけど」

「いつまで亡霊に取り付かれているつもり」

「亡霊？」

「死んだ人がブログにコメントを書けるとでも思っているの？
まさか、本気でそんな事を考えてはいないでしょうね」
「ブログの事を知っているのか」

「目を覚まして、しっかりと現実を見るのよ」

「墓の通行人というのは君だったのか」

「やっぱり、満月はあなただったのね」
「なぜだ」

「あなたを死人の手から救ってあげるためよ」
「・・・」

「どうしてなの？」

「俺は・・・」

「俺は彼女が怖いんだ！」

「意気地なし！」

「あなた男でしょう」

「でも、本当に怖いんだ。

君を愛すると彼女が化けて出てきそうで。

夜になると怖くてトイレにも行けないよ」

「弱虫！」

「怖くて、怖くて・・・」

「信じられない！」

「怖いよ」

「夜が怖いよ」。うつうつうつ。」「」

そう言うと、満は子供のようになめそめそと涙を流し始めた。

咲きは満の涙を見てあきれ果ててしまった。

「死人が恋敵なんて。やってられないわ。
死んだ人間とどうして勝負が出来るのよ。
同じ土俵でないと勝負にならないじゃないの」

咲きにはもう仕事もプレゼンもどうでも良かった。

「私、帰るわ」

「ええ、仕事はどうするんだ。
プレゼンに間に合わなくなるぞ」

「プレゼンなんか、もうどうでもいいのよ。
あとは、あなた適当にやってね」

「そんなあ」

そう言うと、咲きは制作室を逃げ出すように走って出て行った。
夜の街を咲きはひたすら走った。

走っても、走っても、咲きのやるせない気持ちは消えなかった。

9話 あの世界で勝負

咲きは仕事を放り出して芦屋にある自宅に戻った。

今日徹夜してでも作業を続けないと、プレゼンに間に合わせる事は容易な事ではない。

でも、咲きにはもうプレゼンなんかどうでも良かった。

咲きは冷蔵庫を開けた。

中には、缶ビールが6本入っている。

咲きは6本全部を取り出し、テーブルの上に缶ビールを並べた。

「今日は徹底的に飲んでやる」

プシュ。

1缶の半分位を咲きは一気に飲んだ。

そして、残りをもうひと息で。

2缶、3缶、4缶、5缶を空にしたあたりで酔いが回ってきた。

酔った勢いで、咲きは空のブログを開いた。

自分が書いたコメントの下に新しいコメントが入っている。

思考力の鈍った頭で名前を確認。

コメントの主はブルースかいと書かれている。

「げえええつ、死人からだ」

酔っている頭が過敏に反応した。

そこには次のようなコメントが書かれていた。

墓の通行人さんへ。

あなたは男を知らない。

ねえ、図星でしょう。

愛にはこの世、あの世の境はないのよ。

あの世に行けばこの世の男を抱けないだって。

笑わせないでよ。

あいつをと寝たわ。

嘘って？

だったら、満月に聞いてご覧よ。

ブルースかい

「嘘っ！」

咲きはコメントを読んで心底驚いた。

（死人から返事が来るなんて・・・）

「信じられない」

「あなたは・男を知らない。
ねえ、図星でしょう」

「私を・小馬鹿にする・あの言い回しは
学生時代から・あの女の特徴だ」

「このコメントは・松坂空が・書いたものだろうか」

「そ・そんな・馬鹿な」

それつが回らない独り言を呟きながら、咲きがオーバーに頭を左右に振った。

「あいつが・満と・寝ただって・・・。
くそつたれが。」

そんな事が・そんな事が・あるはずが
ないじゃないか」

「馬鹿野郎！」

咲きはコメントを読み荒れに荒れていた。

「死人相手じゃ・勝負にならない」

「畜生！」

「よし、死んでやろうじゃないか」

「あの世で・勝負だ」

「満は・俺の男だ。
お前なんかに・お前なんかに・渡すもんか。
吠え面・かくな」

咲きは一人でわめき散らすと愛車のキーをデスクの引き出しから取り出した。

そして、ふら付きながらマンションに隣接する駐車場へ。

赤いワゴンXに乗り込むと、咲きは深夜の街を走り出した。

阪神高速湾岸線に入ると、咲きはアクセルを踏み込んだ。

グングンと車のスピードが上がって行く。

まるで、ハリウッド映画のカーチェイスのように荒っぽく前の車を抜き去って行く。

かなり酒の酔いが回っていたが、かえって咲きには大胆に運転が出来た。

「学生時代から・俺を舐めやがって」

「俺を舐めんな」

「あの世で・勝負しようじゃないか」

「やってやろっじゃないか」

「待っている」

閑空に向って車を飛ばしている咲きが車の中で吠えた。

「満は・俺の男だ」

「お前にだけは・絶対に渡すもんか」

車は空港連絡橋に差し掛かった。

咲きはさらにアクセルを踏み込んだ。

ブ〜ブブ〜。

「満が・お前の男」

「笑わせるな！」

「アッ
アッ
ハハハ・・・」

「ウッウッフッフ・・・」

「ざけんな！」

「満は・俺の男だ」

「俺だけの・男だ」

「決着をつけてやる」

「くそ女が・
そこで待ってる！」

咲きに乗せた車は海を目掛けて全速力で突っ走った。

ザブーン。

ブクブクブク・・・。

赤い車は海に吸い込まれて行った。

10話 死神と乳房

満は咲きの葬式の帰り道、井沢課長の言葉を思い出していた。

井沢は咲きの写真を放心状態で見詰めていた満の耳元で次のように囁いた。

「あの時、和久君はなんで仕事を放り出して帰ってしまったんや」
「・・・」

「お前、何か言ったんとちゃうか？」
「・・・」

「これでプレゼンはうちの負けやな。
そやけど、お前は死神みたいな男やな」

「死神？」

「そや。お前を愛した女は前の彼女といい、和久君といいみんな死によるやないか」
「そうなんだ」

「そやけど、もったいない話やな。

若い女性が二人も死ぬとはな。

お前のどこがそんなにええのんか、俺にはさっぱりわからへんわ」

「僕の責任で二人の女性が死んだ・・・」

「まあ、みんなお前の責任とは言えへんけどな。気にせんとき」

「僕の責任だ」

「そんなに自分を責めんでもええやないか」

「僕の責任だ。みんな僕のせいだ。

僕はどう償えばいいのдарう。

課長、お願いです。教えて下さい」

「俺かてわからへんわ」

「悪いのは僕だ」

「僕はどうしたらいいんだ」

「誰か、教えてくれ」

満はそう言いながら葬儀場を後にした。

そして、知らず、知らず、空の母親のいる尼崎の西難波に向っていった。

満は夢の家に着くと、無気力に玄関のチャイムを押した。

「あら、どうしたん」

「ママ！」

玄関に出てきた空の母親の夢に満はいきなり抱き付いた。

「ママ！咲きたんが、咲きたんが死んだのでちゅ」

満は口を尖がらせて夢に夢中で訴えた。

「えっ、死んだんか」

「そうか。あの女が死んだんか」

「僕の責任なんでちゅ」

「あの女が死んだんか。空、良かったな」

「空たんを死なせたのも僕なんでちゅ」

「どうして死んだんか、坊や教えてくれる」

「車で海に突っ込んだんちゅ。」

僕が二人のお姉ちゃんを死なせたんでちゅ。

みんな僕の責任なんでちゅ。

ママ！うつうつうつうつ・・・」

満は夢の胸で泣きじゃくった。

「何や、空と同じ死に方やないか」

「ママ！僕が、僕が悪いんでちゅ。

ウワーン。ウワーン。ウワーン・・・」

「坊や、泣かなくてええんよ。あんたは悪い事あれへん。悪いのは、あの女や」

「僕や、僕や、僕や・・・」

「坊やは悪い事あれへんねんよ」

「いやや。いやや。僕のせいや」

「いやや」

満が駄々をこねている。

「坊や、ちよつと待ってや。

ママは今お仕事中だったんよ。

あっちの部屋に一緒に行こな」

「うん、ママ」

「お利口さんやな」

「僕、お利口さんでちゅ」

「ほな、行こな」

二人は手を繋いで玄関から夢の部屋に移った。

「ここはママの仕事部屋。

坊やお入り」

「あつ、パソコンだじょ」

4畳半の部屋にはデスクがあり、その上に2台のパソコンが置かれている。

夢はパソコンで株取引を行っていた。

1台のパソコンは株価を。

もう1台のパソコンは空のブログを画面に映し出している。

「パソコンはママのお友達なんよ。

坊やが来るまでママはパソコンで遊んでたんよ」

「あつ、空さんのブログだじょ」

「空は今までここでコメントを書いていたんよ」

「ママ、僕にも見せて」

「坊や、目を瞑ってご覧」

「ハイ、ママ」

「ほら、消えた。」

もう空はお墓へ帰ったんよ」

「どうして、ママ」

「あの女が死んだから、もう空のお仕事は終わったんやで」

「空たん、帰ったんでちゅか」

「そうやで。帰ったんよ。」

坊や、空にお別れしてくれる」

「空たん、バイバイ」

「坊や、お利口さんやね」

「僕、お利口さんでちゅ」

夢は満の頭を撫で撫でした。

「ママ、おっばい」

「仕方のない子やな」

「じゃ、坊や、ママのブラジャーを外してくれる」

「うん、外すじよ」

満は夢の黒のブラジャーを外した。

「ママのブラジャーだよ」

満は夢のブラジャーを手に持ってひらひらとさせている。

「坊や、いい子にできる」

「僕、いい子にしまちゅ」

「じゃ、おっぱいよ」

夢は赤子に乳を飲ませる母親のように胸をはだけて乳房を差し出した。

「わあゝい」

「わあゝい」

満は夢の乳房に夢中でむしゃぶり付いた。

「僕が悪いんじゃない」

「僕が悪いんじゃない」

「僕が悪いんじゃない」

「悪いのは彼女たちだ」

「ううん。

お姉ちゃんたちでちゅ」

満はそう言いながら夢の乳房を力いっぱい吸った。

「うっぱ うっぱ うっぱ」

「うっぱ、うっぱ」

「うっぱ・・・」

「ママ、おっぱいが出ないよ」

「いややね。

この子ったら

「いやだ。いやだ」。

おっぱいが欲ちいよ」

「聞きわけの無い子やね。

出ないものは、出ないんよ」

「いやだ」。いやだ」

「欲ちいよ」

満はなおも夢の乳房を激しく吸った。
そして、乳首を本気で噛んだ。

「痛っ!!」

乳首を噛まれた夢の悲鳴が部屋中に響き渡った。

満は夢の胸の谷間から、いつまでもいつまでも離れる事は出来なかった。

(了)

*この物語はフィクションです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2722f/>

亡きカノ

2010年11月4日13時42分発行